みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

生態資源の広がり：モンゴル遊牧世界における資源の変容：モンゴル国の土地問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5643

12

生態資源の広がり

「モンゴル遊牧世界における資源の変容
—モンゴル国の土地問題」

小長谷有紀

本章のねらい：2006年，モンゴル国は建国800周年を祝って元旦から大晦日まで多様な祭典を実施し，多くの外国人観光客を迎えて賑わった。確かに800年前の1206年，草原の覇者チンギスはモンゴル族の統一を果たしてカン（のちにハーンと呼ばれる）を名乗り，今日この地域がモンゴル高原と呼ばれる礎を築いた。けれども，だからといって現在のモンゴル国をそのまま800年遡ることができるわけではない。

現在のモンゴル国の前身はモンゴル人民共和国である。それは，ソ連に続いて世界で2番目に社会主義を採用した国であり，世界で最初に「衛星国」という呼び名を与えられた国である。ユーラシア世界を牽引してきた遊牧文明を受け継ぎながら，20世紀においては社会主義化とその放棄という人類史の大きなうねりを経験した国である。

このモンゴル国を取り上げて，遊牧と呼ばれてきた牧畜システムについて，社会主義のもとでの近代化とその後の市場経済化のもとでの変容を解説する。換言すれば，モンゴル国の土地資源の変容を通じて，資源とはいかに自然の事物であろうとも人間社会の操作によって変化しうるものであることを確認しよう。

＜キーワード＞：モンゴル，遊牧，生態資源，近代化，市場経済化，土地私有化

1. 遊牧とは何か？

モンゴル高原では古来より匈奴，烏桓，鮮卑，柔然，高車，突厥など様々な名で知られる諸集団が家畜を利用しながらその勢力を展開してきた。その牧畜システムの詳細は知りえないけれども，記録に残された断片から「移動性の高さ」が注目されてきたことは確かである。

たとえば，司馬遷は『史記』の匈奴列伝で「畜は草を食らい水を飲み，時に随いて転移す」と表現している。こうした表現はその後も諸文献に継承された。『後漢書』の烏桓伝には「水草を随いて放牧し，居に常処なし。穹廬を以って舎となす」とあり，やや下って『北史』の突厥伝には「穹廬氈帳，水草を随逐して遷徙する」とある。このように，中国では北方の牧畜民の移動性について早くから注目され，記録されてきた。一般にこれが遊牧と呼ばれている。

遊牧民を意味する Nomad という英語はラテン語で牧草を意味するので，語源としては Pastoralism と Nomadism はほぼ同義となる。ただし，今日ではそれぞれ意味が振り分けられている。すなわち Pastoralism はもっぱら家畜とともに暮らして利を得ること（牧畜）を意味し，その範疇に移動性の低いものから高いものまでが含まれる。一方，Nomadism は生業として牧畜に限定せずに移動性にのみ焦点があてられ，旅芸人や養蜂業者など多様な職業が含まれる。そこで，ここでは移動性の高い牧畜を遊牧すなわち Nomadic Pastoralism と確定しよう。

同じモンゴル高原ではあっても，現在，モンゴル国と中国内蒙古自治区とでは牧畜における移動性がかなり異なっている。中国内蒙古自治区での人口密度は 20.15 人／平方キロメートル（2005 年）であり，モンゴル国の数値 1.64 人／平方キロメートル（2005 年）と比べて圧倒的に高い。中国内蒙古自治区には概してモンゴル族の約 5 倍の漢族などが住

み，都市化や農耕化が広範囲で見られるのに対して，モンゴル国では農耕化も都市化も一部の地域に限られる。こうした社会環境の違いを反映して，圧倒的な人口密度の差があり，牧畜システムのもつ移動性が異なっているのである [Humphrey, C. and D. Sneath 1999]。

今日，中国内蒙古自治区では遊牧を単にモンゴル族の「文化」と見なすにとどまらず，ユーラシア世界における「文明」として積極的に評価するようになっている［敖仁其 2004；孛・吉爾格勒 2002］。しかし，実態上，牧畜における移動性は喪失され，遊牧とは呼びがたい。

モンゴル国の場合，どれほどの移動性が認められるだろうか。モンゴル国には人口の約 14%にあたる 36.4 万人の遊牧民が他の仕事に従事することなく草原部で家畜とともに暮らしている。ヒツジ・ヤギ・ウマ・ウシ・ラクダの 5 種類の家畜を自然環境に応じて選択し，群れとして維持し，生計を立てる。畜舎などの固定施設に囲うことは一時的にとどまり，ほぼ年間を通して家畜の群れを草原で放牧する。放牧地はいつも一定ではない。第 1 に季節的に宿営地を変える。第 2 に季節的宿営地には複数の候補があり，年によって選択する余地がある。第 3 に災害時には恒常的に利用する領域を越えた移動が認められる。第 4 に宿営地への移動とともに宿営集団の構成も変わる。すなわち社会構成もまた柔軟で移動的である。このように高い移動性が保持されている[小長谷 1997]。

そもそも乾燥地域にとっては，単に降水量が少ないことよりも「年較差」が自然環境を利用するうえでの大きな問題となる。降水量の時間的かつ空間的な偏差が大きいため，一定の場所で家畜の群れを飼育すると植生への致命的な負荷をもたらしかねない。降水量の時空的偏差に対応して家畜の群れによる植生への負荷を調整する必要が生じる。この調整を移動によって維持している牧畜システムがすなわち遊牧である。

近年の研究によれば，遊牧における移動性の高さは自然環境に適応的

なものであるばかりでなく，さらに自然環境を維持していることが明らかになっている[藤田 2003]。

2. モンゴルにおける遊牧の特徴

一般に，牧畜と言えばメスの家畜を飼うことだと認識されている。実際に，地中海地域で飼育されているヒツジの群れは大半がメスである。というのも，オスの多くは当歳で屠られるからである。オスが間引きされた結果，群れの大半はメスとなる。世界中の諸牧畜民に関する記録を網羅的に整理したDahlらによれば，「ヒツジとヤギの群れはほとんどメスである」と明記されており，他の家畜でも同様である[Dahl, G. and D. Hjort 1976]。

これに対してモンゴルの場合，家畜の群れの数十%がオスである（表12－1参照）。ただし，オスは成熟したあとでメスを取り合って群れを分裂させることのないように成熟前の段階で去勢されている。群れの中に多数のオスが去勢されて生き残っている点がモンゴルにおける遊牧の大きな特徴である。これを仮に「去勢オス畜文化」と命名しておこう。

表12－1 家畜種別の成メスの割合
（出典：Mongolian Statistical Yearbook 2005）

（単位：千頭） （%）

	家畜の頭数	成メスの頭数	成メスの割合
ラクダ	254.2	76.3	30.0
ウマ	2029.1	569.7	28.1
ウシ	1963.6	764.3	38.9
ヒツジ	12884.5	5751.8	44.6
ヤギ	13267.2	5721.8	43.1
単純合計	30398.6	12883.9	42.4

もし，都市社会との交易が活発であれば，余分なオスをわざわざ去勢する必要はなく，子の段階で早々に売却することができよう。そして都会では子ヒツジの肉料理がオスによって作られることになる[小長谷 2005]。これに対してモンゴル高原では，オアシス都市などの恒常的な市場に恵まれないという社会環境の特徴と，オスを間引かずとも飼育できるだけ恵まれているという自然環境の特徴とに呼応して去勢オス畜が大量に生き残ってきた。そして，この去勢オス畜こそは，歴史上，大いに活躍した騎馬遊牧民の軍事力にほかならない。

かつて世界最速の乗り物であったウマも，世界最強の曳き物であったラクダやウシも，去勢オスを役畜として利用したものである。大量に生き残された去勢オスは，まさしく軍事力として維持されてきた。役畜として供されないヒツジも，軍事用の補給部隊であり，自ら歩くロジスティックスであるという意味で軍事力の一部と見なしてよいであろう。

このように，大量に去勢オスを生かして残す遊牧は軍事産業と言い換えても過言ではない。ところが，20 世紀になるともはや家畜の武器としての価値は激減する。すなわち，社会主義下の近代化過程での畜産業の推進は，家畜の平和利用が開始されたことを意味する。

3. 遊牧の近代化

近代化の様々な側面のうち，産業部門では以下の三つの大きな変化が挙げられる。第 1 に草原にあった遊牧が変えられ，第 2 に草原になかった農業部門が創設され，第 3 に草原でない都市が作られ，そこで工業部門が創設されたことである[小長谷 2004]。この新しい産業部門の担い手として労働者を作り出すために，草原では女性たちがせっせと子どもを産んでいた[小長谷 1999]。その結果，人口は急増し，それらがもっぱら首都に吸引された。

草原にあった遊牧については大きな変化として以下の三つを挙げておきたい。第1に社会主義的集団化が行われ，第2に畜産物の開発が行われて工業原料として搬出され，第3に固定的施設が建設されて，それらへの依存が高められたことである。

社会主義的集団化とは，清朝下で多様な身分に分かれていた遊牧民が一律に牧畜協同組合の成員になることである。牧畜協同組合の数は1957年に678に達し，全戸数のうち30.1%が組織化され，また全家畜頭数のうち42.5%が共有化されたとある[外務省アジア局中国課 1962]。さらに2年後の1959年になると組織化率100%が達成したとされている。そして1973年には，全国に271の牧畜協同組合（ネグデル）が設置され，そのほかに31の国営農場が設置されていた[Academie des Sciences de PRM 1979]。このように時間をかけながら集団化が実施された。

1918年の貴重な統計と比較すると[マイスキー 1926]，社会主義的集団化によって私有家畜頭数が増えたわけではない。変わったのは，大所有者の質である。かつてチベット仏教寺院にはジャスと呼ばれる財産があり，その畜群はジャスの家畜と呼ばれ，周辺に住む貧乏な遊牧民に委託放牧されるのが常であった。委託放牧の条件は多様であるが[利光 1986]，多くの遊牧民が所有権のない家畜によって生計を維持していた。このような寺院から牧畜協同組合へ家畜所有権が移転したのである。

社会主義という擬似的宗教の下，諸寺院に代わって協同組合が富の再配分を果たしたことになる。と同時に，均一な遊牧民が創出された。すなわち遊牧民は，かつてのように多角的に家畜を利用するのではなく，去勢オスウマばかりとか，母子ヒツジ群などというような画一的な種類で構成される群れの放牧を担当する，賃金労働者へと転換された。また貧困層はもっぱら新しく建設される国営農場へ積極的に移住して生計を立てた。

畜産物の開発とは，人々にとって生活様式であった遊牧が国家にとっての産業へと転換すべく，畜産物の原材料を首都の工場へ送り出すようになったことである。そのもっとも顕著な例が毛である。かつてフェルトの材料である羊毛は脱毛したものを拾って採集されていたにすぎず，1930年代後半になって「毛は黄金」というスローガンの下，幹部自ら剪毛作業に従事してようやく剪毛が全国的に普及したのであった。毛は各地方中心地に建設された工場でフェルトに加工されるほか，首都の工場では毛織物や絨毯に加工された。いずれもモンゴル高原では伝統的に生産されてこなかった産品である。豊富な獣毛がありながら，自ら織りの技術をもたなかった遊牧に，毛の利用がさらに付け加わった。

固定的施設への依存とは，春や冬の宿営地に防寒施設が備えられるようになったり，ゴビに井戸が掘削されたり，施設整備が行われたことである。こうした固定的施設の建設によって移動性は概して小さくなったと言えよう。

このような近代化過程を経た20世紀の遊牧にとって自然資源とはどのようなものであったかを以下に述べる。

4. 遊牧における生態資源

モンゴル国では1959年，ネグデルと呼ばれる牧畜協同組合すなわち生産用の組織と，ソム(郡)と呼ばれる行政上の単位とが，一対一対応することとなった。この一致により，ソムに所属する遊牧民が季節的に移動できる領域は，当該行政域の範囲内となった。この行政域の面積は，概して清朝時代の行政単位である旗よりも狭くなった。ただし，自然災害に際しては越境がそのつど認められていた。また，農業の進展とともに生産される麦類のふすまを飼料とするなど農業との複合によるリスク回避が実現したので，長距離移動だけに頼ることはなくなった。さらに，

学校や病院などの社会サービスを享受するために，人々は形成された拠点の周辺にまとまって住むようになった。

このように，移動の範囲は縮小し，生活様式全体として定着化は進んだと見てよい。けれども同時に，生産様式としては移動化が推奨されていた［利光 1983］。オトルと呼ばれる移動は，かつては馬群の遠隔地放牧や逃避行を行うための派生的な移動であったが，これを以前にも増して積極的に秋に実施することによって，草原利用の高度化が推奨されるようになった。すなわち，移動の範囲や距離が縮小しても，移動回数は増加が図られていたとまとめることができる。具体的にはどのように移動していたのであろうか。

北西風を避けることのできる場所はもっぱら冬や春の宿営地として選定され，そこに固定施設が建設された。こうした施設については，宿営地を共にする集団によって利用権が確保される。一方，川筋や湖沼付近など水場に恵まれている場所は夏用牧地として共同利用に供される。ここで他者を排除するのは難しい。旱魃のために他の行政組織に属する遊牧民が来訪した場合，これを追い出すことはできないのである。降水量に恵まれて草丈があっても水場のない地域では，放牧が難しいので，あらかじめ草刈場として設定して協同作業を行うか，もしくは降雪が期待できれば冬用牧地となる。

このように，遊牧は，ままならない降雨や降雪に応じて，水源と植生とを季節的にうまく組み合わせて利用する生態学的な経済活動である。広義に自然環境を構成する諸要素の中から利用できる要素を組み合わせた状況，それを「生態資源」と名づけたい。すると，遊牧にとって移動とはこうした「生態資源へのアクセス」に他ならない。換言すれば，一定の土地を確保するよりも，変化する状況に応じて移動するアクセス権こそに意味がある。

5. 民主化以降，市場経済化による変化

モンゴルでは1989年末から民主化運動が活発になり，1990年に一党独裁を放棄し，1992年に新憲法が制定され，モンゴル人民共和国からモンゴル国へと名称が変わった。この間，市場経済化への移行過程でショック療法と呼ばれる経済政策が採用された。公的な支援が一気に失われたため，遊牧民の間で大きな地域格差（図12－1参照）と世帯格差が出現した。

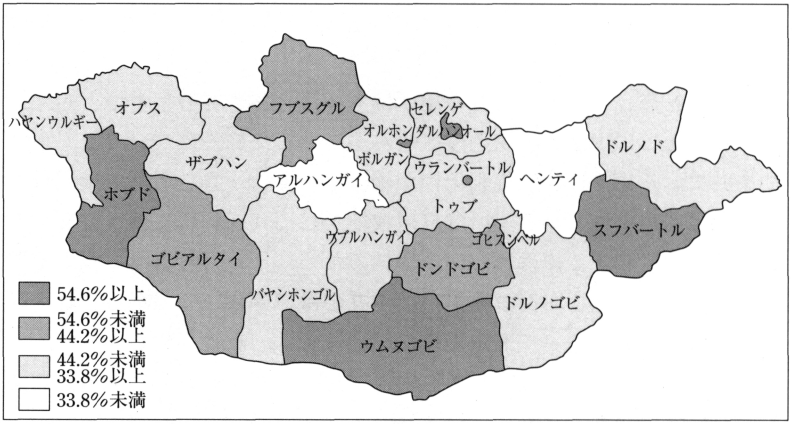

図12－1 電灯普及率（出典：Mongolian Statistical Yearbook 2005）（児玉香菜子作成）

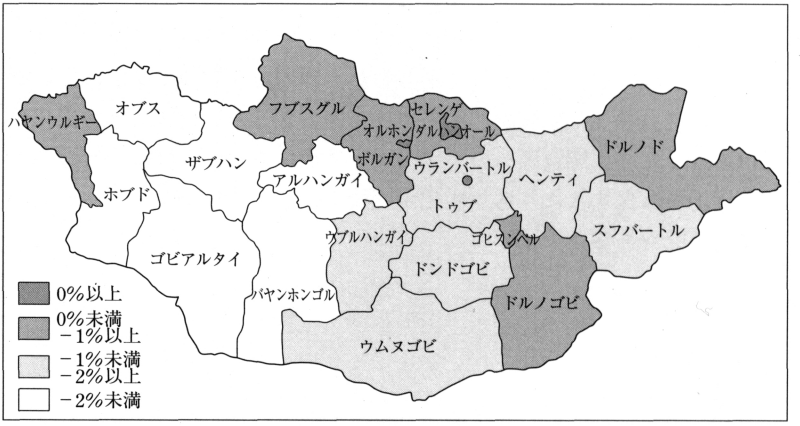

図12－2 純移動率（出典：Mongolian Statistical Yearbook 2005）（前川愛作成）

市場経済へ移行すると，畜産物を商品として搬出する公的な販路が閉ざされ，距離が変数として大きな意味をもつこととなった。地域格差を克服するために移動力をもつ遊牧民は自ら首都付近へ移動した。「大移動」と呼ばれる現象は今なお続いている（図 12－2 参照）。

2005 年の統計によれば，1000 頭以上の家畜をもつ遊牧民は全体の 0.70％で彼らは井戸掘削や固定施設の建設など土地に対する資本投下力が高い。一方，統計上の貧困ラインとして認定されている 50 頭以下の家畜しかもたない貧困層は全体の 37.0％に及ぶ[National Statistical Office of Mongolia 2006]。

所有頭数の多い世帯ほど，多角的な畜産物を販売して安定的な現金収入を得ているのに対して，所有頭数の少ない世帯ほど，ヤギのカシミヤに依存しており，したがって経営が不安定であると推察される（表 12－2 参照）。頭数による経済格差は経営戦略の差と見てよいであろう。

表12－2　モンゴル遊牧民における世帯格差
（2003年7月ウブルハンガイ県にて調査）

	家畜頭数	ヤギ率	現金収入	カシミヤ依存率
A家	500 頭	36％	4300＄	3％
B家	300 頭	40％	1100＄	40％
C家	200 頭	25％	800＄	60％
D家	100 頭	25％	250＄	100％

このような地域格差や経済格差を反映して遊牧民は多様化している。一概に説明することが難しくなっていることを承知したうえで，遊牧民の資源利用に関する今日的変容をまとめてみよう。

第 1 に生態資源よりも社会資源に依存して移動している。自ら市場経

図 12－3　道路近くに集まりがちな宿営地（2006 年 8 月トゥブ県アタル郡にて撮影）

済へ近づこうと西部から首都近郊への移動が認められる。さらに，植生に対応して移動するよりも道路脇にとどまることが多くなった（図 12－3 参照）[Fernandez-Gimenez 1999]。第 2 に鉱産資源の開発によって生態資源の破壊が進んでいる。現在，国土の大半において外国系資本の試掘権や採掘権が設定されており，鉱産資源法は国内最大の政治論争の的となっている。遊牧民による反対運動も起きている。第 3 に観光開発など土地への投資を遊牧民自ら開始している。こうした投資先をもつようになるとそれが主要な社会資源となるだろう。

2002 年に制定された新しい土地法によれば，モンゴル国民は土地を自

らの居住目的で所有することができるほか，60年の期限で「占有」することができる。もっぱらこの「占有権」を利用して，都市部では法的に禁じられている土地の売買が実質的に行われている。一方，遊牧民の間では，冬や春の宿営地に対して「占有権」を設定するように定められているが，実際に権利設定はそれほど進んでいない。なぜなら，土地利用の権利を固定化することによって移動する自由を喪失することを人々は拒んでいるからである。このように都市民と遊牧民という国民の間で，土地の所有をめぐる権利意識は大きく異なっており，法的に一括して扱うことは難しくなっている。

6. さいごに

そもそもモンゴル語には距離を示す単位はあったが，面積を示す単位がなかった。面積を正確に測るという概念がなかったのである。そのことは，遊牧において土地だけでは意味をもたなかったことと呼応している。遊牧にとって意味のあるのは土地そのものではなく，その土地にある草や水であり，それらは時間的に変化する状況である。そうした状況を情報として入手してはじめて「生態資源」として利用される。すなわち遊牧民にとって資源とは自らの情報力と移動力とによってアクセスされる可変的な存在なのであった。

しかし，市場経済へ移行し，国際金融機関の指導によって土地私有化過程を歩むこととなって以来，土地が直ちにそのまま資本となりつつある。伝統的な価値観を維持する地域社会とグローバルな価値観を伴う新しい開発とが共存するような政策が今日，必要とされている。

研究課題 1

現在，地球環境問題の一つとして「砂漠化」が指摘され，その原因と

して一般に「過放牧」が指摘されている。そのような予見的前提をいったん保留して，モンゴル国の遊牧民にとって草原環境がどのように悪化しているか，していないかを考えてみよう。

研究課題 2

現在，約 10 万人のモンゴル人が国際的に移動している。様々な情報を収集し，有益な資源を組み合わせてアクセスしている。こうした家畜をもたずに移動する人々にとって何が資源なのかという観点から考察してみよう。

●引用文献

1) 外務省アジア局中国課 『モンゴル人民共和国（宣伝員必携）』（上巻），1962
2) 小長谷有紀『モンゴル　暮らしがわかるアジア読本』河出書房新社，1997
3) 小長谷有紀「草原の国を変えた女性たち」窪田幸子・八木祐子編『社会変容と女性－ジェンダの文化人類学』ナカニシヤ出版，pp. 4-35，1999
4) 小長谷有紀『モンゴルの二十世紀－社会主義を生きた人びとの証言』中央公論新社，2004
5) 小長谷有紀『世界の食文化モンゴル』農文協，2005
6) 利光（＝小長谷）有紀「オトルノート－モンゴルの移動牧畜をめぐって－」『人文地理』35-6　人文地理学会　pp. 68-79，1983
7) 利光（＝小長谷）有紀「モンゴルにおける家畜預託の慣行」『史林』69-5 史学研究会　pp. 140-164，1986
8) マイスキー「現代蒙古」1926（南満州鉄道株式会社庶務部調査課編著『外蒙共和国(上)(下)』に所収。大阪毎日新聞社）
9) 藤田昇「草原植物の生態と遊牧地の持続的利用―植物学からみたモンゴル高原」『科学』73-5　岩波書店　pp. 563-569，2003
10) Academie des Sciences de PRM, *Atlas ethnologique et linguistique de la Rwpublique Populaire de Mongolie,* 1979

11) Dahl, G. and D. Hjort, *Having Herds*, University of Stockholm, 1976
12) National Statistical Office of Mongolia, *Mongolian Statistical Yearbook 2005*, Ulaanbaatar, 2006
13) Humphrey, C. and D. Sneath, *The End of Nomadism?*, White Horse Press, 1999
14) Fernandez-Gimenez, 'Reconsidering the Role of Absentee Herd Owners: A View from Mongolia', *Human Ecology*, 27-1 : 1-27, 1999
15) 敖仁其主編『制度変遷与遊牧文明』内蒙古人民出版社, 2004
16) 孛・吉爾格勒『遊牧文明史論』, 2002

●参考文献

• 梅棹忠夫『狩猟と遊牧の世界』講談社, 1976
• 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社, 1996
• 小長谷有紀ほか『中国の環境政策　生態移民』昭和堂, 2005
• 松井健『遊牧という文化―移動の生活戦略』吉川弘文館, 2001